笑顔による集団間バイアス是正効果の検討 (2): 性別による検討

○樋口匡貴¹ 矢代直毅²

(上智大学総合人間科学部¹ 株式会社セプテーニ²)

Key words: laugh, smile, intergroup biases, gender

目 的

他者からの信頼のシグナルとして笑顔が機能することが知られている。信頼ゲームを用いて笑顔の効果を検討した Scharlemann, Eckel, Kacelnik, & Wilson (2001) は、写真によって提示された対戦相手が笑顔であった場合には真顔であった場合よりも多くの金額を提供することを示した。また同様の検討を行った大藁・森本・中嶋・小宮・渡部・吉川 (2010) では、女性の笑顔の場合にのみ信頼獲得効果が認められた。

本研究では笑顔によるこの信頼獲得効果について、その効果の適用範囲を検討する。人類が直面する最大の課題の一つに集団間の対立がある。集団間対立は最小条件集団パラダイムなどを用いて検討が行われてきており、単にカテゴリを分けただけのまったく意味のない集団間での資源分配ゲームであっても、内集団成員にはより多く、外集団成員にはより少なくといった形で分配金額に差が現れる集団間バイアスが発生することが知られている (Tajfel, Billig, Bundy, & Flament, 1971)。

そこで本研究では、信頼ゲームにおける対戦相手の笑顔によって、集団間バイアスが是正されるかどうかを検討することを目的とする。その際、笑顔には複数の表出形態があるとする指摘 (エクマン & フリーセン, 1987) を踏まえ、笑顔と真顔の比較だけではなく微笑についても検討する。また、笑顔に対する評価の性差も指摘されていることから (McKeown, Sneddon, & Curran, 2015), 参加者の性別についても検討の対象とする。

方 法

実験参加者 大学生 296 名 (男性 62 名, 女性 234 名, 平均年齢 19.97 歳)。

実験計画と手続き 表情 (笑顔 / 微笑 / 真顔) × 集団成員性 (内集団 / 外集団) × 参加者の性別 (男性 / 女性) の 3 要因参加者間計画であった。実験は冊子を用いて大学の教室で集団で行った。絵画嗜好性課題を用いた最小条件集団パラダイムで群分けを行った後、3 表情のうちいずれかを示す女性の写真を提示した。その際、その女性の絵画の好みを示すことで集団成員性の操作を行った。その後、写真の女性との信頼ゲームを行わせ、第 1 プレイヤーとしての選択を行わせた (0-1000 円)。

結 果

各条件における信頼ゲームでの提供額を Fig. 1 に示した。この得点について 3 要因分散分析を行ったところ、各要因の主効果は、表情: $F(2, 283) = 2.71, p = .068, \eta_p^2 = .019$, 集団成員性: $F(1, 283) = 1.82, p = .178, \eta_p^2 = .006$, 参加者の性別: $F(1, 283) = 23.76, p < .001, \eta_p^2 = .077$ となった。また各要因の交互作用は $F_s < 2.09, p > .13, \eta_p^2 < .015$ となり、いずれも有意ではなかった。

各表情における集団間バイアスの程度を検討するために、参加者の性別に各表情における集団成員性の単純主効果の検定を行った。その結果、男性においては、真顔条件では集団成員性による提供金額の差が大きかった一方で ($p = .043$, Hedge's $g = .921$), 微笑条件 ($p = .472$, Hedge's $g = .305$)

Fig. 1 各条件における信頼ゲームの提供額。
(エラーバーは標準誤差)

および笑顔条件 ($p = .255$, Hedge's $g = -.718$) では集団成員性による差が消失していた。また女性においては、いずれの条件においても提供金額に集団成員性による差は見られなかった ($p > .313$, Hedge's $g < .227$)。

考 察

本研究の結果、信頼ゲームにおける対戦相手が真顔の場合には、内集団成員と外集団成員との間で提供額に大きな差があることが示された一方で、対戦相手が笑顔あるいは微笑であった場合には、集団成員性による提供額の差が消失することが示された。すなわち、笑顔および微笑による集団間バイアスの是正効果の可能性が示唆された。しかしながらこの知見は男性参加者の場合のみに見られるものであり、女性参加者の場合にはこのような結果は現れなかった。

この男性における笑顔による集団間バイアス是正効果は、笑顔の外集団成員への提供金額を増加するという形で行われていた。内集団への提供額を下げることによる是正ではなく、外集団への提供金額を増やすことによる是正のパターンは、笑顔が信頼のシグナルであるとした先行研究の知見と一致する。

一方女性において集団間バイアス is 正効果が見られなかった理由は、女性による女性の笑顔の評価の特徴によって説明することができるだろう。McKeown, et al. (2015) によると、女性は女性による笑顔を実際よりもより偽笑顔だと判断する傾向がある。本研究における笑顔表出はいずれも女性の写真によるものであった。そのため、真の笑顔だという判断にならず、結果として集団間バイアスが是正されるほどの信頼獲得につながらなかったものと考えられることができる。

本研究の発展課題としては以下の 2 点が指摘できる。まずは男性の笑顔表出の効果の検討である。本研究では笑顔の表出を女性によるものに限定して検討を行った。今後男性による笑顔についても検討が必要である。また 2 点目は、異なるゲームを用いた検討である。信頼ゲーム以外の検討を追加することによって、なぜ笑顔が集団間バイアスの是正につながるのかについての示唆が得られるかもしれない。

(Masataka HIGUCHI, & Naoki YASHIRO)